

まえがき

本書を手にとってください、ありがとうございます。

この本は次の人のために書きました。

- ・ 知的障がいでお悩んでいる人
- ・ 知的障がいのお子さんの家族や支援者
- ・ 「教育」を仕事としている人

はじめまして。松本加寿美です。

私は愛知県の公立中学校で特別支援学級の担任をしていました。私は大学を卒業したあと、一般企業に就職をしました。学校という場所で働き始めたのは、結婚・出産をして育児がひと息ついた頃です。それまで、職場でもプライベートでも、障がいのある人と関わることはまったくありませんでした。

障がい児教育についてほとんど知識も経験もない私でしたが、障がいのある生徒たちとの出会いはすぐにやってきました。この仕事に就いた翌年、突然そのクラスの授業を担当することになったのです。

【失敗しかなかった日々】

特別支援学級は初めてですから、主に授業をする先生がいて、私はサポートをする感じで授業に入ることになりました。サポートすればいいといっても、どんな授業をするのかなんてわかりません。一応、自分なりに楽しい感じの自己紹介を考えたり、自分の子どもが使っていた小学校の教科書を引っ張り出して読んでみたり、本屋さんへ行って資料や問題集に目を通しておいたり、できる準備をしていきました。

初授業の日、教室に入つてすぐに察しました。自分が準備してきたことはまったく役に立たないと。授業どころか、生徒たちとコミュニケーションを取ることすら難しく感じました。

自己紹介をしても、目を合わせてくれる生徒はほとんどいません。頭の中は「どうしよう」でいっぱいになりました。

そんなふうに参加した特別支援学級でしたが、わからなくても、待っていても誰も教えてくれません。お母さんが産後に、育て方も知らないまま育児をスタートさせるように、私も特別支援学級での先生の時間がスタートしました。もちろん、最初は失敗しかしませんでした。あるとき、授業時間が始まった席についていない子がいました。「座りましょう」と声をかけても反応がないので、近づいていくとその分、後ずさりするのです。

余計に席から離れてしまったことにとまどい「えっ、ここに座るのよ」と言っただけで生徒に近づきますが、近づいた分、また離れていきます。もうおわかりですね。そうです、気づいたときには授業もしないで、真剣に追いかけて汗をかいていました。今は笑い話にしかありませんが、このときの私は真剣でした。

他にも、音楽好きの生徒を調子に乗せすぎて学校のパイプ椅子を2脚も壊したり、テストをしている

教室の近くで泣いている生徒に、泣き止ませようと声をかけてさらにひどく泣かせてしまったり、話せばきりがありません。

失敗ばかりの私ですが、周りにはいつもベテランの先生がいる環境が学校です。特別支援学級の生徒たちとも上手にコミュニケーションを取るベテラン先生にあつて私にないものは、『一般学級の生徒と同じ判断基準で接する』ということでした。

その頃の私は、支援学級の生徒に毅然とした態度をとることができませんでした。

「障がいのある子どもにも善悪をはっきり示してもわからないだろうし、責めるだけだ」

「できないんだからやらせるなんてかわいそう、私がやつてあげないと」

自覚していたわけではありませんが、こんな気持ちの隅っこにありました。

私が判断基準を持つて接していなかったことが、生徒たちの失敗を増やす原因になっていたのだと、今ならわかります。

【教育の先にあるものは何か】

失敗しかなかった私ですが、「教育」の目的を考えたときに、自分の中でようやく一つの基準が持てました。

「教育」の先にあるものは「幸せ」です。人の「幸せ」は、より難しい計算ができたり、漢字が書けたりすることでしょうか。だとすれば、知的障がいのある子は幸せにはなれません。

もちろん、漢字も計算も生活を豊かにする大切なものだということはわかっていますが、知識や技術の習得が直接幸せには結びつきません。私の個人的な意見ですが、私は自分の人生を自分で決めていくこと以上に自由で幸せなことはないと思っています。ですから、私自身の子どもたちにも計算や漢字を覚えることが幸せだとは教えていません。

ただ、子どもが自分の力でできたことを一緒に喜びました。私の子育ては、「どうしたら自分でできるようになるかな」と考えることでした。「自分の人生を能動的に生きること」、つまり「自立」すること

こそが幸せだと教えてきました。

実際に子どもたちを見ていると、「できた」という経験は人をワクワクさせたり夢中にさせたりします。「できた」が増えるほど、いろいろなことに意欲が出せ、自分で自分を信じる力が大きくなっていくように思います。

「自立」というのは、簡単に言えば自分で決めることです。自分で決断した瞬間が積み重なって時間となり、その時間が積み重なって1日となり、その毎日が積み重なって人生になります。

障がいのある子どもたちも、ここは同じではないでしょうか。そんな視点で生徒たちを見てみると、あまりに受動的で、自分に自立できる力があることさえ知らないように見えました。

知的障がいがある子どもたちに、自由で幸せな人生を送ってもらいたいという願いをどうかなえたのか、生徒たちと一緒に歩いた学校生活のことを書きました。

本書でご紹介する生徒たちの成長が、みなさんの近くにいる子どもたちや支援者の未来の小さな希望となれば幸いです。